

2027年国際園芸博覧会（GREEN×EXPO 2027） の開催に向けて

国土交通省 都市局 参事官（国際園芸博覧会担当）

1. はじめに

2027年国際園芸博覧会（正式略称：GREEN×EXPO 2027）は、神奈川県横浜市旭区及び瀬谷区に位置する旧上瀬谷通信施設の一部を会場として開催されます。

本稿では、2027年国際園芸博覧会の概要及び準備状況について紹介します。

2. 国際園芸博覧会の概要

国際園芸博覧会は、国際的な園芸・造園の振興や花と緑のあふれる暮らし、地域・経済の創造等を目的に、世界各国で開催される博覧会です。開催には、「国際園芸家協会（以下、AIPH）¹」の承認が必要となり、開催期間や会場の最低面積等によりカテゴリーが設けられています。最上位であるA1の開催に当たっては、AIPHの承認に加え、「博覧会国際事務局（以下、BIE）²」の認定が必要となります。

日本国内では、1990年に大阪の鶴見緑地で開催された国際花と緑の博覧会（花の万博）が、唯一のA1国際園芸博覧会であり、約半年間の会期で、国内からは屋内外で325団体



図1 本博覧会の会場位置

位置付け：最上位の国際園芸博覧会（A1）
国際博覧会条約に基づく認定博覧会
開催場所：旧上瀬谷通信施設の一部（約100ha）
（横浜市旭区・瀬谷区）
開催期間：2027年3月19日～9月26日（6か月間）
参加者数：1,500万人（ICT活用等の多様な参加形態含む）
※大阪花の万博では約2,300万人が来場
会場建設費：約320億円
テーマ：幸せを創る明日の風景
～Scenery of the Future for Happiness～
開催者：（公社）2027年国際園芸博覧会協会

図2 本博覧会の開催概要

1 国際的レベルで園芸生産者の利益を図り、園芸技術の向上を図るために設立された非営利団体

2 「国際博覧会に関する条約」に基づき設置されている国際機関

からの出展を得るとともに、82の国、55の国際機関が参加し、約2,300万人の参加者数を記録するなど、盛況を博しました。花の万博の開催は、花と緑を通じた国際交流に貢献するとともに、日常生活における花と緑の重要性についての認識を深める機会となりました。また、我が国の花き園芸・造園技術の向上に寄与し、産業面でもガーデニングブームが起き、花壇苗の出荷量が増加するなどの大きな効果がありました。

3. GREEN×EXPO 2027の概要

本博覧会は、気候変動等の世界的な環境変化を踏まえ、花や緑との関わりを通じ、自然と共生した持続可能で幸福感が深まる社会の創造を目的として開催することとしています。

本博覧会の主役となる植物は、食料、資源、文化等の基盤であるとともに、人間の暮らしに身近な存在であり、生物生息域の提供や二酸化炭素の固定等を通じて環境問題とも密接に関連しています。本博覧会では、こうした植物の多様な役割に鑑み、植物に焦点を当て、来場者の皆様に体感いただくことで、ネットゼロやネイチャーポジティブに向けた取組が求められる現在において、人や社会と自然との関わりを見直す機会となることを目指しています。

開催者は、令和4年通常国会で成立した特別措置法に基づき指定された「公益社団法人2027年国際園芸博覧会協会（以下、博覧会協会）」です。

4. GREEN×EXPO 2027の開催地

本博覧会の会場となる旧上瀬谷通信施設は、横浜市の郊外部に位置する約242haの広大な土地です。1940年から旧日本海軍の倉庫施設補給工場として使用されており、戦後は米軍の通信施設として使用されてきました。2015年に米軍から返還されるまで、土地利用が制限されてきたことから、農地や緩やかな起伏の草地など豊かな自然環境が広がり、南北に流れる相沢川、和泉川の源流部、谷戸地形等の貴重な自然資本が残っています。周辺は丹沢山・富士山が眺望できるとともに、近接する樹林地（市民の森）との隣接部分に存在する林縁は、多様な生き物の生息環境となっています。また、東名高速道路横浜町田ICに近く、複数の鉄道路線に囲まれ、多様なアクセス手段が利用できるため、農業振興と都市的土地利用が融合した新しいまちづくりが進められており、郊外部の活性化拠点として大きなポテンシャルを有しています。

旧上瀬谷通信施設の土地利用については、横浜市において「旧上瀬谷通信施設土地利用基本計画（令和2年3月）」が策定され、「郊外部の新たな活性化拠点の形成～みらいまで広げるヒト・モノ・コトの行き交うまち～」をテーマに、今ある緑や農地を保全しつつ、



図3 旧上瀬谷通信施設の航空写真